ワールド・ムック942
mono 特集
生きることに迷ったら、インディアンの声を聞け
インディアンの日々
カバーデザイン／伊東繁雄（プロジェクトQ）

目次

4 はじめに Foreword

5 Ⅰ部族 Nations
図説【主なインディアンの部族】
1.東部森林地帯～シカを狩り、カヌーを操る
2.大平原～バッファローを追い、騎兵隊と戦う
3.南西部～畑を耕し、ジュエリーを作る
4.北太平洋岸～サケを獲り、トーテムポールを彫る

16 Ⅱ住まい Homes
1.ウィグアムとロングハウス 東森林地帯の住まい
2.ティーピー 大平原の住まい①
図説【ラコタ族のティーピー 作る】
図説【ラコタ族のティーピー 建てる】
図説【ラコタ族のティーピー 使う】
3.アースロッジ 大平原の住まい②
4.プエブロとホーガン 南西部の住まい
5.プランクハウス 北太平洋岸の住まい

40 Ⅲ着るもの Wear
1.羽根冠
図説【ラコタ族の羽根冠】
2.男の上着
3.女性の衣服
4.ボトムス
5.ナバホ族のブランケット
6.チルカット毛布
7.モカシン① 東部森林地帯
8.モカシン② 大平原と南西部
9.ヤマアラシの針毛刺繍
10.ビーズ刺繍
11.インディアン・ジュエリー① 元祖ナバホ族のジュエリー
12.インディアン・ジュエリー② プエブロ・インディアンのジュエリー
13.動物素材を使った装飾

94 Ⅳ動物・植物 Wildlife
1.シカの仲間
2.クマ・オオカミ
3.ワシ
4.バッファロー①主食としてのバッファロー
5.バッファロー②様々な利用方法
図説【バッファローは走るデパート】
6.バッファロー③バッファロー狩り
7.サケやクジラ
8.野生の植物
9.畑作物

116 Ⅴ旅と交易：Transportation, Trade & Communication
1.陸の旅
2.馬
3.樺皮カヌー
4.丸木舟・皮舟
5.毛皮交易
6.南西部の交易所
7.コミュニケーション

132 Ⅵ戦い War
1.東部森林地帯 イロコイ族の戦い
2.大平原 ラコタ族の戦い
3.南西部・砂漠のインディアン アパッチ族の戦い

140 Ⅶ トピック Topics
1.パイプ
2.クレードルボード
3.トーテムポール
4.容器
5.カチナ人形
6.インディアン・フルート
7.ラクロス
8.トマホーク
9.パウワウ

主なインディアンの部族
Native Nations

【北太平洋岸】

トリンギット
アラスカ南部に住む。シロイワヤギの毛で織った「チルカット毛布」が有名。

ハイダ
クイーンシャーロット島に住む。朽ちたトーテムポールが林立する廃村が世界文化遺産に。丸木舟作りや彫刻が得意。

クワキウトル（クワクワカワク）
バンクーバー島北部と対岸一帯に住む。彼らのトーテムポールはハイダやトリンギットのものに比べ大胆・奇抜。

カウチャン
バンクーバー島の南東部に住む。「カウチンセーター」を編む。

マカ
ワシントン州北部に住む。バンクーバー島西部のヌトカ族と同じグループ。沿岸を回遊するクジラを捕らえた。

【東部森林地帯】

ワンパノアグ
17世紀の初めプリマスに入植した清教徒にトウモロコシの育て方などを教えた。

イロコイ連盟
５部族が連合。東部で最強。毛皮交易の商権を独占するため、近隣の諸部族をつぎつぎに打ち滅ぼした（ビーバー戦争）。

ヒューロン
他部族を訪ねてビーバーなどの毛皮を集め、交易商に転売する、中間交易で栄えたが、イロコイ連盟との戦いに破れ、衰退。

オジブワ（チペワ、アニシナベ）
東部森林地帯で最大。スー族を圧迫し大平原へ押し出す。樺の樹皮を利用して住居やカヌー、容器などを作る。

【大平原】

ブラックフット
米加国境付近の３部族（ブラッド、シクシカ、ピーガン）の連合体。サーシー族、グロバントル族とも結び、北方平原で最強。

テトン・スー（ラコタ）
18世紀に東部森林地帯から大平原に進出。大平原で最大・最強。第七騎兵隊を全滅させるなど、歴史は波乱に富む。全インディアンを代表するような部族。

シャイアン
18世紀に東部森林地帯から大平原に進出。ラコタ族に住みかを追われ、敵対したが、後に同盟関係を結ぶ。

ポーニー
男はモヒカン狩り。大平原の川辺に定住し、トウモロコシなどを育てつつバッファローも狩る。スー族とは互いに仇敵。

マンダン
ミズーリー川上流に定住。村は毛皮交易の拠点となる。19世紀初めに探検隊や画家が訪ね、生活を記録した絵画が多数残る。

コマンチ
大平原の部族の中でいち早く馬を手に入れ、南方平原を席巻。南方平原で最強の部族となった。

【南西部】

ナバホ（ディネ）
全米最大の部族。15世紀初めにカナダから移住してきた。進取の気性に富む。毛布などの毛織物や銀細工で知られる。

アパッチ
ナバホとともにカナダ西部から移住してきた。プエブロ・インディアンの村々やスペインの入植地を略奪した。

ホピ（モキ）
西方のプエブロ・インディアン。伝統を重んじ、古くからの暮らしと文化を守ってきた。陶芸やカチナ人形、銀細工で知られる。

ズニ
ホピと同じく西方のプエブロ・インディアンで「砂漠プエブロ」と呼ばれる。トルコ石やサンゴを多く使った銀細工で知られる。

タオス
リオグランデ川周辺には、世界文化遺産に登録のタオス、トルコ石で首飾りを作るサントドミンゴ、高台の上のアコマなど20近くのプエブロ（村）がある。

3.アースロッジ

Earth Lodge 太平原の住まい②

大平原は乾燥した土地柄で、農業には向かず、インディアンは狩りによって生活するほかはなかったが、例外もあった。ミズーリー川などの川筋には、雪解け水などで川が氾濫したときに運ばれた土砂によって、「氾濫原」と呼ばれる平らな土地ができる。氾濫原は水の便がよく、土壌も肥えているので、農業に適している。そこで、ポーニー族やアリカラ族、マンダン族は、川のほとりに恒久的な村を作り、農作物を育てて暮らしていた。

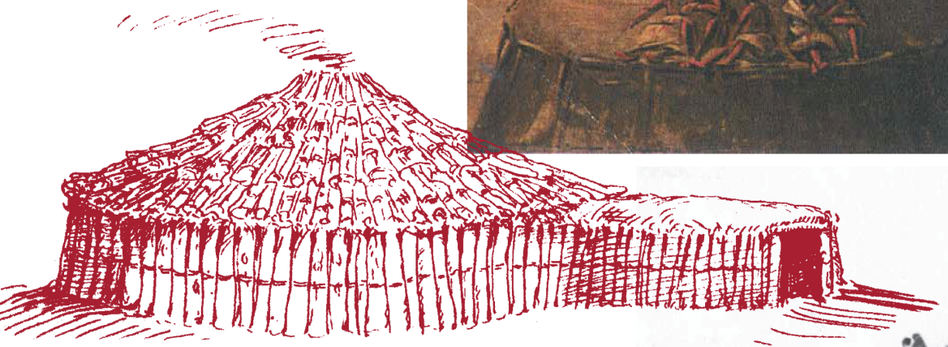
彼らも、春と秋にはバッファロー狩りに出かけ、その際にはティーピーで寝泊りしたが、それ以外はアースロッジというドーム型の住まいに住んでいた。丈夫な木材で作った骨組みに、柳の枝を編んだマットを敷き、その上に粘土や土や草を厚くかぶせた住居だ。直径7～15メートル、高さは3～6メートルほど。厚い外壁が、大平原の厳しい暑さ寒さをさえぎった。

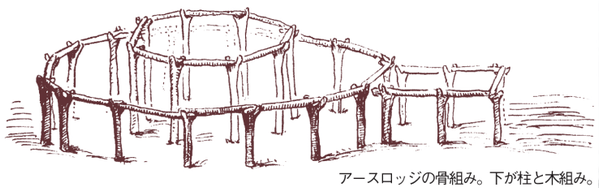
1棟のロッジに40～60人が暮らし、馬を収容するスペースもあった。壁際にはベッド、馬の柵囲い、薪置き場などが配された。床の真ん中は、直径90センチほどの範囲を少し掘り下げ、平らな砂岩を敷きつめて、炉を設けた。ロッジには窓がなかったが、屋根の中央には丸い穴が開いていて、炉の煙を排出するとともに、外光をとり入れた。また、床には、農作物を貯蔵する穴蔵もあった。穴蔵は深さ2メートル前後。梯子を使って出入りする。入り口は直径60センチほどだが、次第に広くなり、底の直径は1～1・5メートルほどあった。

アースロッジが十棟から数十棟、時には百棟以上集まって、村を形成した。大きな村では、数千人の人々が住んでいた。村は、川の近くの小高い丘の上に作り、周囲に柵をめぐらせて外敵の侵入を防いだ。付近の氾濫原に畑を設け、トウモロコシ、豆、カボチャ、ヒマワリ、タバコ、スイカ等を育てた。畑を耕し作物を育てるのは女性の仕事で、男性は狩りや交易に従事した。

同じ大平原の部族でも、スー族やシャイアン族と違い、アースロッジに住む人たちはアメリカ軍と戦った歴史がなく、西部劇にも滅多に登場しない。しかし、スー族やシャイアン族が18世紀になってようやく大平原に出てきた新参者なのに対し、アースロッジに住む人たちは、10世紀頃には既に大平原に住み着いていた先輩で、スーやシャイアンは、彼らから大平原で生活する術を学んだのである。たとえば、シャイアン族の場合、大平原に進出を始めた18世紀半ばには、アースロッジに住んでいた時代があった。また、スー族でも、ラコタ族（テトン・スー族）の東に住むヤンクトン・スー族は、アースロッジに住んでいた。ラコタ族にしても、歴史をたどれば、バッファローを追うのに欠かせない馬をアースロッジに住む部族から譲り受けたからこそ、大平原に進出することができたのである。

マンダン族やアリカラ族の村は、いつも同じ場所にあるので、大平原の交易センターとなった。スー族やシャイアン族など狩猟民は、彼らの村を訪ね、干し肉や毛皮を差し出して、農作物を得た。後には、白人の交易商が参入。村人が狩猟民から得たバッファローやビーバーの毛皮を、銃・毛布・ビーズ・鉄器などと交換したのである。しかし、後にそれが悲劇を招く。白人から天然痘などの伝染病をうつされると、限られた場所に大勢が集まり住んでいたのでたちまち蔓延し、大量の死者がでたのだ。たとえば1837年、マンダン族は、天然痘の蔓延によって、人口が2500から250に激減してしまったのだった。





アースロッジの骨組み。下が柱と木組み。上が土を被せるばかりとなった状態。
Original Illustration by E.T.Seton

上：マンダン族の村。広場中央の樽のようなものは村の公的・宗教的中心で「大きなカヌー」と呼ばれる。その周りに村の要人のアースロッジが並ぶ。ジョージ・キャトリン画／右：マンダン族のアースロッジ内部。天井の穴から外光が入り、馬を飼うスペースもある。カール・ボドマー画（1833年）／左：ポーニー族のアースロッジ。

10.ビーズ刺繍
Bead Work

1880年代のラコタ族の男児用ツーピース。鞣した革の全面にベネチア・ビーズでびっしりと刺繍している。
Morning Star Gallery(Santa Fe, NM)
Photo by Yasuji Yushina（WPP）

インディアンが衣服に施した装飾といえば、まず思い浮かぶのがビーズ刺繍だろう。インディアンは、毛皮交易によってガラス製ビーズが大量に手に入るようになると、その新素材を好んで用いた。ヤマアラシの針毛刺繍も、次第にガラス製ビーズの刺繍に代わっていったのである。

大平原では、ガラス製ビーズが普及し始めたのは19世紀初め頃から。当初は、直径が8～10ミリの大粒ビーズだったが、ロッキー山脈方面への毛皮交易が進むにつれて直径5～7ミリの「ポニービーズ」が普及するようになり、さらに、1840年代以降には、もっと小粒な、直径1～4ミリの「シードビーズ」が出回るようになった。シードビーズの出現によって精緻な表現が可能となり、ヤマアラシの針毛刺繍は衰退し始めたのである。

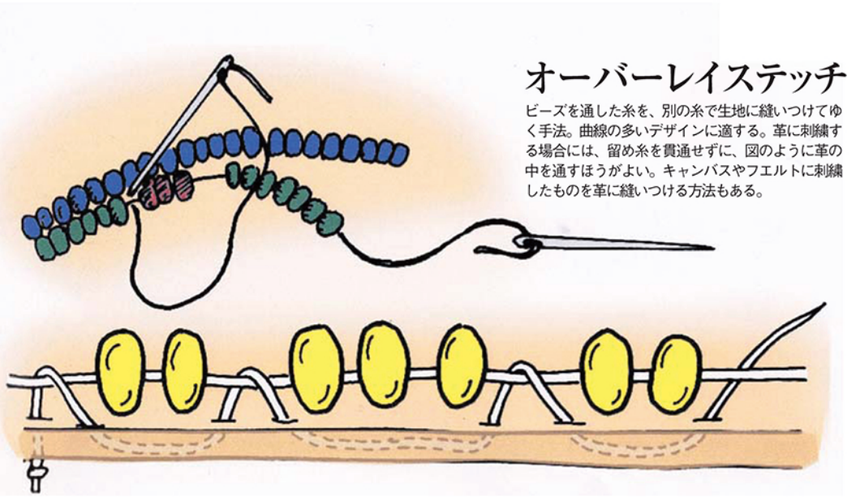
つまり、インディアンの伝統とされるビーズ刺繍は、実際には「ガラス製ビーズ」という外来の素材がもたらされて初めて可能となったのだが、それ以前に「ヤマアラシの針毛刺繍」という独自の伝統があったからこそ、その伝統を受け継ぎ、発展させる形で発達したのである。だから、東部森林地帯や大平原北部など、もともとヤマアラシの針毛で刺繍する伝統があった地域では、ビーズ刺繍も盛んに行なわれた。一方、南西部や北太平洋岸など、その伝統のない地域では、ビーズ刺繍もあまり普及していない。

ただし、ヤマアラシの針毛刺繍の場合と異なり、ビーズ刺繍については、刺繍を行なうこと自体が神聖視されたり、ビーズ刺繍に熟練した女性の同志会のようなものが作られたりすることはなかった。やはり、ガラス製ビーズという外来の工業製品による工芸だからだろうか。

ビーズ刺繍のデザインは、地

オーバーレイステッチ

ビーズを通した糸を、別の糸で生地に縫いつけてゆく手法。曲線の多いデザインに適する。革に刺繍する場合には、留め糸を貫通せずに、図のように革の中を通すほうがよい。キャンバスやフエルトに刺繍したものを革に縫いつける方法もある。



右上：ポニービーズ。1800～1840年ごろアメリカ西部で毛皮交易などに使われたビーズ。右下：シードビーズ。1840～50年ごろよりアメリカ西部で普及し始めたビーズ。Sioux Indian Museum（Rapid City, SD）／左：様々なビーズ。インディアンは交易などで白人や他部族から様々なビーズを手に入れた。

右：オブジワ族のバンドリアバッグ。儀式など特別な時にのみ着用する装飾品。個人や部族間の友好を記す贈り物としても用いられた。
Crazy Horse Memorial（SD）

オジブワ族の腰布にオーバーレイステッチで施されたビーズ刺繍。著者撮影

4.バッファロー①

主食としてのバッファロー Buffalo as Staples

上：バイソンBaison/Buffalo（*Bison bison*）、北米ではバッファローと呼ばれる。著者撮影。／下：アラパホ族の集落。バッファローの肉がラックに架けられ干されている。

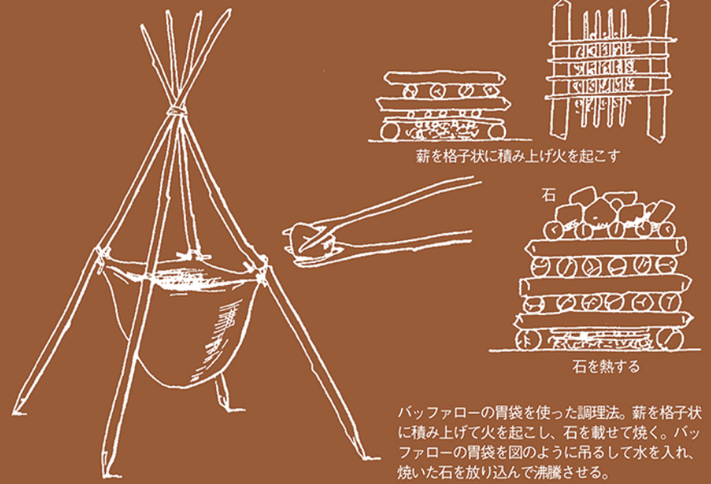
ロッキー山脈の東に広がる大平原は、イネ科の草に覆われ、それを食べてバッファローが大繁栄した。その数は6千万頭にもおよんだという。バッファローは北米大陸最大の動物で、大きなオスでは体重が9百キロにも達する。ところで、「バッファロー」とは、本来、アジアやアフリカの「水牛」を指す。北米のバッファローは水牛ではなく野牛で、正しくは「アメリカバイソン」と呼ぶ。ヨーロッパにも近い種類のヨーロッパバイソンが住んでいる。

ラコタ族など大平原に暮らすインディアンとバッファローとは、切っても切れない関係だった。私たちが米を主食とするように、平原インディアンの主食はバッファローの肉で、煮たり、焼いたり、シチューにするなど、さまざまに調理した。バッファロー狩りの直後などには、ひとりで数キロの肉を平らげた。

食べきれない肉は、干し肉にして保存した。生肉を1センチほどの厚さに切り、大平原の太陽と乾いた風に3日もさらせば、からからに干からびて、もとの肉の6分の1ほどの重さになる。酒の肴でお馴染みのビーフ・ジャーキーの原型だ。

しかし、干し肉は、かさばりすぎて持ち運びには不便である。しかも湿気を吸うと傷みやすい。そこでインディアンは、こうした欠点のない完全保存食「ペミカン」を編み出した。ペミカンを作るには、まず干し肉をよく炙った後、細かく砕いて粉にする。その肉粉を、干したベリーと混ぜ、バッファローの皮で作った枕カバーのような袋に詰め込む。そして、バッファローの骨髄の脂を熱して液状にし、注ぎ込む。後は、袋の口を縫い合わせ、縫い目を脂で封じれば出来上がりだ。一袋の重さは40キロぐらい。厚さ15センチほどの平たい形に整えると、積んで保存するのにも、持ち運ぶのにも便利だった。

ペミカンは携帯に便利な上、長期間保存ができた。ベリーを混ぜないで作った場合には、30年経っても品質は落ちないといわれている。しかも栄養価がすこぶる高い。そのため、白人の毛皮交易商や罠猟師にも愛用された。毛皮交易が盛んになると、大平原のインディアンは、バッファローの毛皮だけでなく、ペミカンを商品として差し出した。遠隔地の交易拠点で働く人たちにとって、ペミカンは不可欠な食糧となった。



バッファローの胃袋を使った調理法。薪を格子状に積み上げて火を起こし、石を載せて焼く。バッファローの胃袋を図のように吊るして水を入れ、焼いた石を放り込んで沸騰させる。

バッファローの胃袋に水を入れ、焼いた石を放り込んで煮炊きする、かつての調理法によって肉を煮ている。
Photo by John Anderson

なお、第二次大戦中にはドイツ軍も兵糧としてペミカンを利用したという。今でも似たものが登山家に愛用されている（バッファロー肉の代わりに家畜牛の肉を、骨髄の脂の代わりにバターを、皮袋の代わりにプラスチック容器を使う）。

1860年代の終り頃から、平原インディアン諸部族は政府と条約を結び、定められた居留地で暮らすようになった。しばらくはバッファロー狩りもつづいたが、やがてバッファローが絶滅寸前に追い込まれると、政府との条約に基づいて支給される家畜牛の肉に頼らざるを得なくなった。しかし、インディアンたちは、牛肉（家畜牛の肉）はバッファロー肉より劣等だと考えた。牛肉を食べると筋肉が軟弱になるというのだ。そこで、牛肉を「軟肉（ソフト・ミート）」と呼び、一方、バッファロー肉には身体を壮健にする働きがあったとして「強肉（ハード・ミート）」と呼んで区別した。

（なお、「インディアンと言えばバッファロー」という思い込みが根強くあるように思われるが、バッファロー肉を主な食べ物にしていたのは大平原に住むインディアンだけである。このことを改めて強調しておきたい。現在のニューヨークやロサンゼルスやシアトル付近に住むインディアンは、バッファローなどほとんど見たこともない暮らしを送っていたのである）

ラコタ族の保存食「ワスナ」。バッファローの干し肉、干したベリーやチェリー、干しブドウ、バッファローの肝臓の脂、骨の髄などをすり潰して粉状にし、混ぜ合わせたもの。長期保存でき、滋養に富み、美味である。著者撮影

ラコタ族のパウワウ（お祭り）で参加者に供するためのバッファローの肉を調理しているところ。著者撮影。Rosebud Powwow（Rosebud 居留地 SD）

右：バッファローの肉。ラコタ族のパウワウ（お祭り）ではこのようなバッファローの肉が供されることがある。著者撮影。Rosebud Powwow（Rosebud 居留地 SD）／左：バッファローの胃袋などを煮込んだ伝統料理『タニガ』。ラコタ族のパウワウの屋台で売っていたもの。著者撮影。Rosebud Powwow（Rosebud 居留地 SD）

◎著者プロフィール

横須賀孝弘（よこすか たかひろ）
1954年、神戸生まれ。東京大学法学部卒。現在、NHKエンタープライズ 制作本部自然科学番組 エグゼクティブ・プロデューサー。
著書『インディアン生活術』（ロングセラーズ）、『ハウ・コラ――インディアンに学ぶ』（NHK出版）、『北米インディアン生活術』（グリーンアロー出版社）、訳書『北米インディアン悲詩――エドワード・カーティス写真集』（共訳 アボック社）、『大平原の戦士と女たち――写されたインディアン居留地の暮らし』（社会評論社）、監修書『北米インディアン生活誌』（社会評論社）など。

WORLD MOOK
ワールド・ムック942（通巻942号）
mono 総合誌
生きることに迷ったら、インディアンの声を聞け
インディアンの日々
平成24年9月1日発行

著者
横須賀孝弘
Takahiro Yokosuka

編集・発行人
今井今朝春
Kesaharu Imai

編集
杉本恵理子
Eriko Sugimoto

カバーデザイン
伊東繁雄（プロジェクトQ）
Shigeo Ito

デザイン
鈴木 学（WPPデザイン部）
Manabu Suzuki

印刷所
大日本印刷株式会社

DTP
ベイス

発行所
株式会社ワールドフォトプレス
〒164-8551 東京都中野区中野3-39-2
電　話●編集部 03（5385）8111　FAX03（5385）5614
●販売部 03（5385）5701　FAX03（5385）5703

©Takahiro Yokosuka, World Photo Press 2012
本誌掲載のデータは平成24年7月現在のものです。
造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がございましたら販売部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り換えいたします。
本書掲載記事の無断転載複製転写を禁じます。
弊社出版物のお申し込みはインターネットをご利用いただけます。
http://www.monomagazine.com/

◎参考資料

Colin Taylor "The Native Americans" (Salamander Books, 1991)
John Warner "The Life & Art of the North American Indian" (Hamyln Publishing Group, 1975)
Royal Hassrick "The Colorful History of North American Indians" (Octopus Books, 1974)
Ruth Underhill "Red Man's America" (The University of Chicago Press, 1971)
Oliver La Farge "A Pictorial History of the American Indian" (Crown Publishers, 1956)
Carrie Lyford "Ojibwa Crafts" (R.Schneider Publishers, 1982)
Robert Ritzenthaler "The Woodland Indians of the Western Great Lakes" (The National History Press, 1970)
George Hunt "The Wars of the Iroquois" (The University of Wisconsin Press, 1940)
Colin Taylor "The Plains Indians" (Salamander Books, 1994)
Thomas Miles "The Mystic Warriors of the Plains" (Mallard Press, 1991)
Reginald Laubin "The Indian Tipi" (The University of Oklahoma Press, 1977)
Colin Taylor "The Warriors of the Plains" (The Hamlyn Publishing Group, 1975)
Royal Hassrick "The Sioux" (The University of Oklahoma Press, 1964)
Robert Lowie "Indians of the Plains" (The National History Press, 1963)
Carrie Lyford "Quill and Beadwork of the Western Sioux" (United States department of the Interior, 1940)
William Turnbaugh "Indian Jewelry of the American Southwest" (Schiffer Publishing, 1988)
Tom Bahti "Southwestern Indian Arts & Crafts" (KC Publications, 1966)
Pat Crammer "Totem Poles" (Altitude Publishing Canada, 2004)
Bobbie Kalman "Nations of the Northwest Coast" (Crabtree Publishing Company, 2004)
Chris Roberts "Powwow Country" (American & World Geographic Publishing, 1992)
"American Indian Art Magazine"
"Whispering Wind Magazine"
"American Indian Crafts and Culture"

横須賀孝弘「北米インディアン生活術」（グリーンアロー出版社 2000）
ロイド・カーン「シェルター」（ワールドフォトプレス2001）
「インディアンジュエリー ターコイズ」（ワールドフォトプレス 2004）
「インディアンジュエリー ターコイズ2」（ワールドフォトプレス 2006）
「インディアンの贈り物」（ワールドフォトプレス 2007）